令和５年度　第１回越前おおの産業ブランド力向上会議　会議録

日時：令和５年５月１８日（木）午後２時～
場所：結とぴあ３０１号室

１　開会

２　委員長あいさつ

３　委員紹介

４　資料の確認

５　議事

（１）越前おおの産業ブランド力向上戦略、
令和４年度事業の実績　及び成果指標の達成状況

事務局：資料に基づき説明

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：観光連盟が公開しているデータ等を見て、他の市町と相対的に比べて大野市はどうかといった見方が大事。４つの地点（城下町エリア、荒島の郷、道の駅九頭竜、六呂師）での満足度調査のアンケートでは、城下町エリア、道の駅九頭竜ともに県の平均を下回っている。観光客ごとの属性を計り、それぞれに合った仕組み作りをしていくことが重要。

委　員：七間エリアは空きスペースが増えてきている。県外からパンフ等を見てきたのにがっかりしたという声を聞くこともある。組合員の高齢化もあり菓子組合も頭を抱えている現状。

委　員：昨年度の入込客数について、分析はどういう風にしているか。

事務局：観光客の増加の要因は道の駅が大きく、観光客が戻ったというところまでは言えない。宿泊については、フレアール和泉が休館していたことなどもあり、まちなかの入込は減っている。

事務局：ゲストハウスやホステルなどの宿泊施設においては、改修が進んだり、インバウンドも戻ってきたと聞く。

委　員：勝山市の民泊も恐竜博物館の影響もあり、思っていた以上に反響がある。恐竜というテーマをどう取り込んでいくかも重要だと考える。何を目的化して大野にきているのか。

委　員：県内全般に言えることだが、ふく割の影響は大きい。同様に、もっとおおの割の使用を目的に大野に来ている方がいる。

委　員：ブランド活用事業補助について、どういった補助をしてきたか。

事務局：イベントや商品開発の相談など、前向きに取り組まれている事業者の後押しといったかたちでサポートをしてきた。

委　員：前向きな気持ちがある事業者でないと、なかなか動いてくれない。前向きに検討していくことが大事。

委　員：データを見ると観光客の年齢構成のバランスがご高齢の方に偏っている。今の宿泊者の実態はどうか。

委　員：気軽に安く泊まりたい若者やご高齢のゆっくり過ごしたい夫婦が増えている。また、大野のイベントに合わせてくる方も多く、問い合わせが多い。ただ、イベント会場までのアクセスなど説明した際に、少し考えますと保留されることもある。

委　員：コミュニティバスなどもっと普及するといい。

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：二次交通は重要なのでタクシー事業者への支援なども検討してほしい。

（2）令和５年度事業について

事務局：資料に基づき説明

委　員：JR デスティネーションキャンペーンについて、北陸三県合同の取組みだが、一番の目玉は福井県だと思う。三県での取組みに加えて、福井県単体でも観光連盟として動いていきたい。また、中部縦貫自動車道の開通を生かした県内周遊についても後押ししていきたい。

委　員：商工業の面での後押しも重要だが、農産業の支援、推進も重要だと考える。

委　員：農業に関して、非常に厳しい状況ではある。大野のブランド代表として里芋が挙げられるが、築き上げてきたブランドを守っていく義務がある。機械化を進めるなどはしている。存続のためにも、若者がやりやすい農業にしていく必要がある。

委　員：産業全体で見ると、中心市街地への動線が弱いと感じる。道の駅から中心市街地への動線をどうするか。連携を強化してまちなかがにぎわうような仕組み作りをする必要がある。

委　員：金銭的な問題もあるが、大野市全体のやる気が出る仕組み作りができるといい。

委　員：中心市街地でお店を貸したいといった方はいるか。

委　員：後のことを考えると、少し慎重になってしまう節がある。

委　員：貸し出すうえでハードルとなるところを行政に支援してもらい、お金を貸す支援というよりも資金繰り等のキャッシュフローをどう考えるかといった支援が大事。結サポの役割でもあるか。

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：関東にいると、中部縦貫自動車道開通などのにぎわいの声が全くと言っていいほど耳に入って来ないのが実態である。順序としてまずは東海・中京の方々を、北陸新幹線開通後にどう呼び込むのかを考えていく必要がある。外から見て、大野がどう見えているのかを意識しながら皆さんと一緒に考えていきたい。

委　員：関東圏では、福井について何も知らないという状態の人も多い。そういった人にいきなり伝えようというのも無理がある。一方で、イベントやキャンペーンがあるとネットやニュースに取り上げられ、福井への興味・関心が湧く。北陸新幹線開業の機会を狙って、食べ歩き等の満足してもらえる仕組みを増やせるかが課題。夜だけでなく昼も楽しめるような仕組みも欲しい。また、荒島岳は IC から最も近い百名山であり、そういった強みも活かしていけるといい。

委　員：こどもに向けた視点が大事だと考える。こどもの時の思い出をもった大人をターゲットにしたイベントを開催したり、こども連れの家族を大切にした戦略を考えていけるとい

い。

（3）ビジネスプランコンテストの開催について

事務局：資料に基づき説明

委　員：アイデアの提案よりも、大野市内の事業者とマッチングできるような仕組み作りができるといい。若狭の鯖缶などビジネス展開に成功している事例も多々ある。武生東高校の吹奏楽部による取組（余っている楽器と不足している楽器とのマッチングシステム）に倣って市内の高校でもやってもらえれば、市内外から目を向けてもらえる取組になるのではないか。

委　員：高校生による取組みはとても積極的に感じる。

委　員：ビジネスプランコンテストはいつ頃を予定しているか。

事務局：未定である。

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：アイデアや熱意はあるが、事業化するとなった時にハードルがある事業も多い。若者のアイデアや熱意を、儲かるような事業としてかたちにしていくことが大事。長い目で見て取り組んで、「大野といえばこの事業が盛り上がっている」といった基盤が固まればそこから事業にチャレンジする人も増えるかもしれない。

事務局：福井のビジネスプランコンテストだと、一般の企業が協賛で審査員をやっている大会もある。将来的に、レベルの高い大会にしていけたらいいと思う。

事務局：ビジネスプランコンテストを提案した経緯としては、大野市の事業者を巻き込み、大野の産業全体で若者を支援しつつ、前向きに取り組んでいこうという思いがある。

委　員：事業者を関わらせることが大事だと思う。

委　員：ビジネスプランコンテストの審査基準として、アイデアの面白さやビジネスの現実性といった視点がある。どちらの視点を重要視するかはっきり決めておくことが重要か。大野市の事業者が新規事業をやるとしたらどういうアイデアがあるか、そこから高校生に考えてもらうのも面白いと思う。

事務局：市の職員もアイデアを提案出来たら面白いと思う。一事業者と協力して事業を作り上げていくことに問題があるかは要確認。

委　員：これらを踏まえて、ビジネスプランコンテストを実施していく方針に異議はない。

6　閉会